

令和4年度自己点検・自己評価

本校の令和4年度における教育活動の概要は次のとおりである。自己点検の評価項目は、看護教育の実際を反映しているIV教授・学習・評価過程、VI入学、VII卒業・進学
の3項目は概ね期待に応答する結果であるといえる。

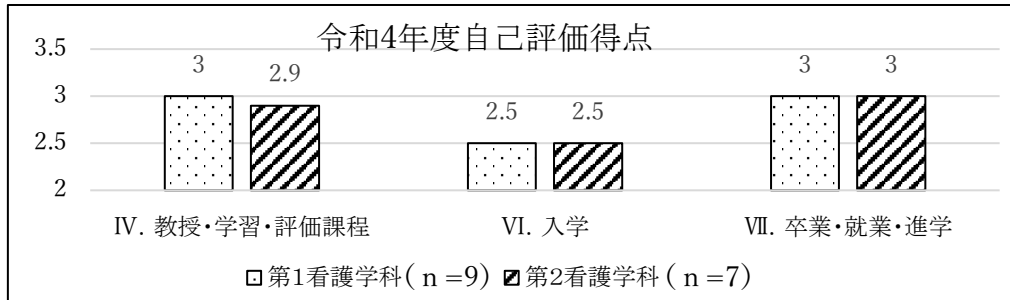


図1. 令和4年度教員による3分野の自己評価

令和4年度取り組むべき課題と結果

課題	結果
<p>1. 実習評価の基準について</p> <p>新カリキュラムに対応した評価表・評価基準を検討し、第1看護学科、第2看護で共有する。</p>	<p>態度評価が占める割合が評価全体の20%~50%と、科目によりばらつきが多かった。態度評価が50%になることは、科目の目的を考えると望ましくないこと。態度評価項目が科目ごとに表現がバラバラであることに着目し、評価項目を検討した。</p> <p>態度評価の割合について、1990年武田氏の「わが国における理科の能力カテゴリーと科学的態度の例」を参照すると、50項目中「科学的態度」として13項目を挙げており、全体の26%を占めている。</p> <p>他校の実習評価表(徳島県立総合看護学校)を参考に、目標から妥当な評価項目数を検討し、20項目とした。態度評価は、誰もが同じように評価できる具体的な表現に精選5項目としたため、全評価20項目中5項目の態度評価25%という結果になった。</p> <p>実習評価表について2科合同で改正に取り組んだ。評価基準を「十分到達できた」、「到達できた」、「到達できたが努力を要する」、「到達できていない」と統一し、評価をABCDから5・4・3・2に変更し点数化した。評価項目の態度評価について、評価項目数が各実習領域で異なっていた。態度評価の項目数の割合を原則、全体数の20%以上にならないよう統一した。</p>

自己点検・自己評価の概要

令和4年度の評価得点は、第1看護学科、第2看護学科ともに令和3年度と同じで

ある。

第1 看護学科

IV 教授・学習・評価過程

1. 教授過程

授業内容間の重複や整合性は、看護技術のマトリックスや安全教育マトリックスをもとに確認している。授業の進捗について、カウンセリングとコミュニケーション論が5月に開講。その後、看護コミュニケーション演習が7月に開講した。そのため、コミュニケーションに関する授業が3科目同時進行となった。カウンセリングはコミュニケーションを理解し技法を活用する目的のため、次年度の学習の順序性、進捗を見直す必要性が生じた。次年度はコミュニケーション論を9月開講とし、12月の基礎看護学実習につなげ、コミュニケーションの基礎的技法を習得したのちにカウンセリング、看護コミュニケーション演習につなげることとした。

また、授業方法や指導技術向上のため、各教員の授業参観を目標に取り組んだが、実際に授業に参加していても、教員間で学びを共有できていない事が課題である。教員研修では、アクティブラーニングの方法や実際の体験を発表して意見交換をし、授業方法の課題を明確にすることができた。実習に関しては、新型コロナウイルスの影響で学内実習となる領域もあったが、実習室でのロールプレイングやペーパーペイシメントによる事例展開を実施し、臨床に近い形で実習が展開できるよう工夫し、目標到達することができた。継続的な学習支援として、スモールグループ制により学生個々への対応が可能なシステムをとっている。効果的な教育・指導を行うために、教員間の協力体制やスモールグループ制の課題の改善に取り組んでいく必要がある。

2. 学習過程

iPad を利用した電子書籍での学習が通常になったが、授業内容を写真や動画撮影をし、授業後に復習する学生が増えている。一方で写真や動画の撮影だけで終わる学生もいるため、今後は学生が効果的に電子書籍を活用し自己学習ができるように取り組んでいくことが課題である。

シラバスの提示や学習への指導は、学生の学習への動機づけと支援を目的として入学時オリエンテーションで講義要綱を用いて説明している。卒業時の講義要綱の活用についての学生評価は前年度より低くなっているため、毎回の授業で次の授業に繋がるようにシラバスを活用して説明していくまた、各科目の授業概要は受講に役立ったと回答した学生の平均得点は 3.18/4 点と(前年度 3.49)より前年度より評価は下がっている。学生が理解しやすいよう、興味・関心がもてるように具体的な記述をするなどシラバスの表記について工夫をしているが、学生の個々の学習への動機づけとなるように今後も工夫を続けていく。また、今年度は学習方法として TAPS(タップス)法を取り入れ、同学年同士や上級生と話し合う機会を設けている。国家試験対策では授業終わりにミニテストを施行して結果を把握し、次の指導の指

標に繋げている。

3. 評価過程

評価について、授業評価は計画的に実施され、教員個々に評価結果に基づき授業を改善している。今後、授業評価の結果をふまえての授業の改善について教員間で共有できるようにしたい。実習評価については、評価基準についての検討を加えていく必要がある。

VI 入学

応募者の推移をみると、令和元年度 64 名、令和 2 年度 65 名、令和 3 年度 58 名、令和 4 年度 51 名、令和 5 年度 40 名と年々減っている。進学相談会は 5 回(前年度 5 回)、令和 3 年度高校訪問は 18 校、令和 4 年度 13 校と減っている。オープンキャンパス参加者人数は令和元年 119 名、令和 2 年 64 名、令和 3 年 61 名、令和 4 年 88 名であり、コロナウイルス感染症による影響で減少していたが回復傾向にある。入学定員を確保できるよう応募数を増やすための募集活動が課題である。

VII 卒業・進学

看護師国家試験の合格率は 94.9%、全国平均の 95.5%を下回っている。卒業時の看護技術の到達状況は卒業時到達レベルⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳにおいて 70%以上の学生が到達基準を満たせていた。到達度が低い項目は卒業前技術演習を行い卒業時の技術経験に近づけた。臨地実習における到達が困難な技術については学内実習で基準を達成することができた。今後も臨地の指導者に教員から依頼するなど連携を高め、臨地実習における到達が困難な技術については学内実習で、卒業到達レベルの基準を達成できるよう計画する。

学生の就職・進学状況は学校要覧で年次推移が見えるようにして、傾向を把握している。「地域に根差すという理念」に対しても、県内就職者率が昨年度と同様 74%と貢献していると評価できる。卒業後(7 か月後)、在校生、教員との交流会を行い、活動状況を把握している。令和 4 年度はリモートで実施し、参加者は 5 名であった。支援体制は整えているが、参加者が少なく、機能していない状況である。卒業後の活動状況把握は交流会参加時にアンケートを実施していた。交流会がリモートになってからは郵送し実施している。返信があるのは半分に満たず、分析、活用までには至っていない。卒業時に交流会の意義について説明し、交流会の参加率が上昇するように工夫することが課題である。

第 2 看護学科

IV 教授・学習・評価過程

1. 教授

授業形態は、学習到達目標に併せて各教員が授業形態を選択している。コロナ感染拡大防止策を講じながらリモートを活用した分散授業を実施した。臨地実習ではコロナの影響で実習施設の受け入れが中止となった期間があり、学内実習を工夫し実

習室でのロールプレイングやペーパーペイシメントによる事例展開などを実施し、学生全員が各実習目標の到達ができた。効果的な教育・指導を行うために、担当した授業案を科目ごとに授業案や資料をファイリングし、教員間で自由に閲覧できるよう保管しているが、授業案については、個々の授業案の指導にまでは至っていない。

2. 評価課程

評価について、授業評価は、計画的に実施され、教員個々に評価結果に基づき授業を改善している。しかし、学生による授業評価の数が減っており、正確な評価になるよう工夫が必要である。令和5年度は科目担当学生に授業評価の回収を依頼し回収率を上げる工夫を行っている。今後は学生に向けて授業評価の目的を伝え、学生の評価力を育てることが課題となる。教員による自己評価も続けており、授業に活用しているが、教員の研修計画に関連付けられていないことが課題である。単位認定のための評価については、履修規定に基づいて行われている。実習評価については、評価基準の見直しを実施し、令和5年度より新基準での評価となる。実習評価の提示について、実習の目標到達ができていない学生については、実習ローテーション毎に評価を提示し実習の課題を明確にしている。しかし実習が到達した学生については、実習ローテーション毎に評価の提示できていない。そのため、実習における課題などが次の実習に活かせていない状況があった。今年度は実習ローテを前期と後期に分けて評価の提示を行った。全ての学生に各実習ローテーション終了後に評価を提示し、学生とともに次の実習の課題を明確にすることが課題となる。

VI 入学

応募者の推移をみると、令和2年度42人、令和3年度41人、令和4年は50人と上昇した。募集活動については、尽誠学園高等学校へのオープンキャンパスの開催や准看護師学校への個別訪問、学生が作成した出身准看学校へリーフレット送付など対象に応じた募集活動などの努力を行っている。令和4年度はコロナ禍の中10回（令和3年8回）の訪問を実施した。今後も募集活動を効果的に行い応募者の確保に努める。

VII 卒業・進学

看護師国家試験の合格率は94.4%と昨年度より上昇した。入学生の学歴や職歴は多様で、学生間での学力の差が広がっている。入学後の学習支援について、学生の特色を踏まえた指導の工夫が必要である。卒業時の技術経験の到達度Ⅰ・Ⅱ・Ⅲレベルの未到達項目についての分析から、学内での演習の可能な項目に対し卒業前技術演習を行い、卒業時の技術経験の到達に近づけた。今後は臨地での実習体験困難な技術項目について、学内での講義・演習との連動について、学内で実施できる教材を含めた検討が必要である。

令和5年度取り組むべき課題

1. 令和6年度の自己評価に向けて、新カリキュラムに対応した自己評価表の評価項目の改正案をまとめる。